

実際に見えないものが見えると言う…

⇒否定せず、話を合わせましょう

とよさと病院 認知症疾患医療センター

【 認知症に人の状態 】

実際にはそこにはないものが見える「**幻視**」は、認知症の中でもレビー小体型認知症で多くみられる症状です。それ以外の認知症でも、せん妄になると、幻視のほか、置物や壁の汚れや柄が人の顔や生き物に見えるなどの錯視（見間違い）が起こることがあります。レビー小体型認知症による幻視は立体的で、リアルで、幻聴が伴うこともあります。

いずれにしても、本人には本当に見えるの（現実）ですから、それを「何もない」と**否定しても、納得できません**。人によっては「自分を否定された」と感じる場合もあります。



【 対応方法 】

①もし幻視が見えていても、興奮したり、怖がったりして**いない**場合は「**そうだね**」などと話を合わせて、見守りましょう。様子を見ながら、「そろそろご飯の時間ですよ」「散歩にでも行きましょうか」などと**話を変えて**、意識をそらすとよいでしょう。

②「知らない人が見てる！」「壁に虫がいて、怖い」など、怯えている様子ならば、部屋の中を探したり「私のお友達だから怖くないよ」「**大丈夫、もういなくなっただよ**」などと声をかけて、安心させましょう。

部屋の中にあるものを何かに見間違えたときは、目に入らないように移動しておきましょう。壁紙やカーテンの柄などが幻視の原因になっている場合は、取り替えたり、部屋を移動したりして対処しましょう。

③幻視や幻聴は、加齢や病気による目や耳の異常が原因で起こることもあります。**眼科や耳鼻科を受診**してみましょう。通院するのが難しい場合には、往診してくれるところを探すとよいでしょう。

④レビー小体型認知症は、アルツハイマー型認知症やパーキンソン病、うつ病などと、誤診されることが少なくありません。治療に効果が感じられない場合は、**医師に相談**しましょう。パーキンソン病のような症状が出ると、つまずきやすくなるので、**転倒**にも注意しましょう。

参考文献：杉山孝博, 認知症の9大法則50症状と対応策, 法研, 2013, P120-121

認知症の人と家族の会, 認知症になった家族との暮らしかた, ナツメ社, 2018, P120-121

2022.6作成